



真言宗豊山派 室戸山(むろとざん) 明星院(みょうじょういん) 最御崎寺(ほつみさきじ)

本尊 虚空蔵菩薩 (高知県室戸市)

(2) 印西大師第19番?・第70番?

大師堂の中に3体の石像があり、右の石像の台座には「第70番」、中の石像の台座には「印西大師第19番」の表示がある。左の石造の表示は不明。また大師堂には「印西大師 第十九番 十余一」名の手書きの額が掲げられている。この番号は何を意味しているのだろうか。印西大師第19番は吉高・西の堂(なお白井大師第19番は河原子・阿弥陀堂)、印西大師第70番は別所・宝泉院。十余一堂は白井大師第24番の番付札所であるが、印西大師では番外なので本番札所を要望したのか。吉高も別所も複数の番付札所がある集落なので、遷座の協議でもしたのだろうか。(令和6年の印西大師のとき十余一堂でお接待している方にお聞きしたのですが、わからないとのことでした。)

(3) 村社香取神社

十余一村字並木西側にあり経津主命を祭る 明治三乙午年(1870年)原野荒蕪地の處開墾につき因て古村成就のため同六年癸酉の登志十月十五日を以右社安置せし 氏子四十一戸(印旛郡誌)

(4) 十余一の開墾(2014.05.15「広報しろい」)

市内北東に位置する十余一(とよいち)地区は、明治時代の下総牧開墾事業により開かれた土地です。十余一は本来「とよひと」と読み、十一番目の開拓地を意味しましたが、明治時代の途中で今の呼び方になっています。

十余一は、江戸時代に下総国内に置かれた小金五牧や佐倉七牧からなる下総牧のうち、小金五牧に属した印西牧の主要部分にあたります。印旛沼や手賀沼に流れ込む河川の源になる湧水地が数多くあり、馬の水呑み場に困らないため、幕府の野馬の牧場として利用されました。

江戸が東京へと改まった明治維新、社会秩序が変わって武士や町人たちが職を失い、窮民と呼ばれる経済的弱者があふれました。新政府は窮民の授産と東京の治安を目的に、幕府から接取した下総牧に窮民を入植し、開墾させて土地や仕事を与えようとしてきました。

明治2年(1869)に開墾局を設け、三井八郎右衛門ら富民を募り、開墾会社を設立させ「東京開墾人」と呼ばれた無籍無産の窮民や、自費開墾ができる在籍有産の近隣農民を「力民」として使い開墾することを任せました。

この時に初富、二和、三咲、豊四季、五香、六実、七栄(ななえ)、八街、九美上(くみあげ)、十倉(とくら)、十余一、十余二(とよふた)、十余三(とよみ)など着手順にちなむ地名の開拓地が誕生しました。明治3年(1870)末頃、十余一は下総開墾会社頭取で一等富民の西村郡司が受け持ち、東京開墾人の十一人使って開墾が始められ、後に谷田村他の自費開墾農民も参加しています。

下総牧開墾事業においては、もともと農業に不慣れの東京開墾人たちはきつい仕事に耐えられず、度重なる災害も続いたために離脱逃亡する者が絶えませんでした。また開墾会社の方も投資回収が困難と判断し、明治5年(1872)に会社を解散します。わずかばかりの土地が東京開墾人たちに分配されただけで、多くの土地は開墾会社の社員の手に渡りました。自費開墾の近隣農民にあっては地主にもなれず、三井や西村らの小作人として位置付けられてしまったため、激しい争議が各地で起こりました。十余一も同様に、命懸けで裁判を闘った山崎治右衛門にち

なむ石碑が現在も香取神社に残ります。

(5) 山崎治右衛門之碑

山崎治右衛門之碑

書置

小金原開懇事件 三郡十九ヶ村惣代十人部里代人松本善五郎代書人椎名啓助一同ニテ諸課ヲ經ト誰モ窮民ノカナシサニ十分ノ利ヲ持ナカラ勝利ヲ得ル事不能 殊ニ十余一村自費開墾ノ処 西村郡司代原寛助 同若林与作兩人種々悪斗ヲ被取工 此度執行之儀ニ付 松丸爲吉 村越久右衛門 湯浅七兵衛 拙者四名身代限差出シ候処 建家者当春ヨリ取コハシニ売渡置候様申上候処 戸長ノ奥印無之ニ付 入札拂ヲ千葉裁判所ヨリ被申付 我七十二及ビ千辛万化ノ苦シミヲ致シテ建候家ヲ 今更取コハサレテハ致方無之殊ニ外三人モ同様難澁尚又世間モ恥敷 殊ニ十余一村農一同難立依之拙者此度自害致候間 此上大審院へ片時モ早ク御願被下 開墾地十余一村并外村々相助リ候様奉願候 右之趣惣代人へモ宣敷御伝言奉願上候

下總国印旛郡十余一村 山崎治右衛門

明治十年七月廿四日

東京出雲町三番地 松本善五郎殿

同 八丁堀八丁目九番地 椎名 啓助殿

此書面松本 椎名両君へ御送り可被下候

山崎治右衛門書置眞書

去ル廿四日自害及候 十余一村山崎治右衛門書置眞書写左之通り

山崎治右衛門 書置ノ写

一、我自害雖致ト決テナケク間敷 免角家納メ我長孫網五郎ヲ大切ニ致シ 家内睦間敷事心懸ヘク事

一、我死後ニハ檢使相濟候上 其許 茂三郎 網五郎 三人ニテ死骸ヲ取仕舞 外親類御厄介ニ不相成候様可仕候事

一、我死スト誰モ決テナケクナ家ノタメ村方タメト心得自害仕候間 必スナケク間敷候事

大和田駅林屋ニ而認ル

明治十年七月廿四日 父より

倅 次 助

長孫 網五郎

昭和五十一年十月十五日 昇 建之